

母親と子どもの情動特性の関連性

奥村, 弥生
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/15692>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 6, pp.159-166, 2005-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



母親と子どもの情動特性の関連性¹⁾

奥村 弥生²⁾ 九州大学大学院人間環境学府

The Relationship Between the Emotional Traits of Mother and Child

Yayoi Okumura (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

This study examined the relationships between the emotional traits of mothers and their children. 285 mothers of 4, 5, and 6 year old children completed a scale that measures how often a mother and her child experience 10 emotions common in daily life. Results indicated moderate associations between the emotional traits of mothers and their children in the case of the same emotion. This suggests that the emotional traits of children are formed before 4 years of age and that they are closely related to their mother's traits. Associations for a number of different emotions between mother and child were found, but positive emotions and negative emotions were not found to be associated. These findings suggests that the emotional development of children is related closely to the same category (i.e., positive or negative) of emotions as their mothers. Further, for the traits of guilt and pride, children become more strongly related to their mother's traits as they grow from 5 to 6 years old. Because guilt and pride appear later than other emotions, these emotions may not develop as traits until after 4 years of age.

Keywords: emotional trait, emotional development, mother-child, childhood

近年、多くの研究者によって、情動は人の適応を支える合理的な機能システムとして捉えられるようになってきている(遠藤, 1996)。喜びや悲しみ、怒り、恐れといった個々の情動は、それぞれが環境への適応を高める機能を有している(Barrett & Campos, 1987)。例えば、喜びは快の内的情感を他者に伝達することで社会的絆を促進する役割を果たし、また怒りは、目標達成の障害物を除去しようとする動機づけとなる(Malatesta & Wilson, 1988)。よって、情動の適応的機能が十分に発揮されるには、状況に応じて全ての情動が利用可能であることが望ましいと思われるが、多くの場合、我々は特定の情動に対する偏向を持ち合わせている。この個人が持つ特定の情動傾向を情動特性と呼ぶ。

この情動特性とは一般的に、情動経験の頻度あるいは情動反応の閾値という点から把握される、時間的に安定かつ一貫した個人の傾向を指す(Lazarus, 1994; Malatesta & Wilson, 1988)。そして、こうした情動特性の発達については、生得的な気質といった遺伝的要因を無視することはできないとしても、それ以上に、環境からの働きかけや相互作用が重視されている(Malatesta &

Wilson, 1988; Magai, Distal, & Liker, 1995)。

例えば Magai, Distal, & Liker(1995)は、情動特性の発達に大きく影響を与えるものとして、社会化の要因を重視している。具体的には、個人の被養育体験(養育スタイル)と愛着の質に着目し、それらと情動特性(日常における情動経験のパターンおよび他者情動の理解・読みとり能力)との関連性を、成人を対象とした質問紙調査で明らかにした。

Magai ら(1995)は、発達の初期に重要な他者とのやりとりの中で繰り返し反復して経験された情動状態が個人の中で固定化し、中心的なものとなると主張している。さらに、一定の偏りを帯びた情動特性は、他者との特定の・持続的な関係性の構築や崩壊を導き、情動特性の偏向をますます強固なものにしていくと考えられる。そこには、発達における情動と認知の絡みあいも作用していると考えられ、例えば、ある種の情動を経験した個人は、他者や事象を一定のバイアスを持って知覚・認知し、結果的にある行動をとりやすくなる(Izard, 1991; Magai & McFadden, 1995)というメカニズムによって、養育者との相互作用に固有の色づけがなされていくといったことが考えられる。

Magai ら(1995)の研究は、これまで多くの場合、理論的提示にとどまってきた情動特性と社会化の要因との関連性をある程度明確に実証したもののといえ、今後のパーソナリティ研究や情動発達の研究に大きな意味を持つものと考えられる。

¹⁾ 本研究は、2001年度九州大学教育学部に提出した卒業論文の一部を大幅に加筆修正したものである。

²⁾ 卒業論文作成にあたりご指導いただきました遠藤利彦先生(京都大学)ならびに多くのご示唆をいただきました北山修先生(九州大学)、針塚進先生(九州大学)に心より御礼申し上げます。また、多くの助言をくださいました先輩方、調査にご協力いただいた対象者の皆様にも厚く御礼申し上げます。

しかしながら、個人の情動特性の発達を考える場合、養育スタイルや愛着の要因ばかりが、これに影響するすべてではないであろう。子どもの情動に発達の刺激を与える重要なものとして、養育者の情動特性について取り上げる必要があるのではないだろうか。

恥および罪悪感の発達メカニズムについて論じた久崎(2003)は、養育者の情動特性から子どもの情動特性の発達への影響を想定しうるとし、二つのパスを提示している。すなわち、養育者の情動特性は、子どもの行動を一定のバイアスを持って知覚・認知し、特定の養育行動を行いやすくなるというプロセスを通して、子どもの情動特性の発達に影響を与える。また、ある情動を経験している養育者がそれを表出することで、受け手である子ども側に、養育者や自分自身の情報についての一定の知覚・認知のバイアスが生じる。そうしたプロセスの相互作用を通して、養育者の情動特性は、子どもの情動特性に重要な影響を与える可能性が考えられる。久崎(2003)は、これを社会化要因として組み込むことが、恥特性および罪悪感特性の形成プロセスの解明に寄与するのではないかと述べている。そして、これは、恥と罪悪感に限らず、他の情動についてもある程度当てはまることと考えられるのではないか。

例えば、悲しみという情動は精神や身体の反応をスローダウンさせる(Izard, 1991)ため、悲しみを経験しやすい養育者は、子どものシグナルに対する認知や反応も相対的に鈍いことが考えられる。そのような養育者に対して、子どもはどんな情動を経験しやすくなるだろうか。無表情で黙って座っている母親に直面している乳児の表情や行動を分析した研究(Hembree, 1986; Tronick, 1990)では、乳児が怒りや悲しみの表情を見せたといったことや、落ち込んでしまったかのように関わりかけをやめてしまったという報告がなされている。このような先行研究から考えると、養育者が悲しみを経験しやすく、子どもの働きかけに応じないことが多ければ、子どもは悲しみなどを経験しやすくなるといったことが考えられるだろう。

他の情動の場合でも、ある情動を経験しやすい養育者が、それにもとづく認知や特定行動を行いやすくなることで、子どもの情動特性に影響を及ぼす可能性は十分に考えられる。

また、このようなメカニズムにおいては、養育者の特定情動が、子どもの同種の情動のみならず、異なる情動に影響を及ぼすこともあると思われる。例えば、親の悲しみの頻度が高いと、子どもがそれを自分のせいではないかと感じて、罪悪感を多く経験するようになる(Zahn-Waxler & Kochanska, 1990)といった報告や、養育者が子どもの失敗や道徳的ルール違反に対するしつけを行う際の怒り反応と、子どもの罪悪感特性・恥特性の間に関連がある(Ferguson & Stegge, 1995)といったこ

とが言われている。これは、個々の情動の機能や特徴が相互に組み合わさって生じる複雑なプロセスであると考えられる。

あるいは、もっと直接的に、情動伝染やモデリングといったメカニズムから、子どもは養育者の情動特性の影響を受けるということも考えられよう。

そもそも人間は、他者の情動表出に対して反応するように準備されて生まれてくると言われる(久保, 1997)。例えば、Martin & Clark(1982)によると、生後十数時間の新生児は、自分自身の泣き声やチンパンジーの泣き声を聞かされたときよりも、他児の泣き声を聞かされたときによく泣いたという。また、年少の幼児が他児が泣いたのを見て自分も泣き出したりする(Hoffman, 1976)といった例もめずらしくない。こうしたことは、情動伝染現象(emotional contagion)と呼ばれている。

養育者に対しても、乳児は生後10週には養育者の喜び、悲しみ、怒りの表現にそれぞれ別の反応をすることが見出されており(Haviland & Lelwica, 1987)、乳児は、養育者の情動表出に出会うと、乳児自身もその情動状態になってしまうように見える(久保, 1997)という。

このように、子どもの情動経験は、他者の情動経験に大きく左右されるものであることが推測される。そして、乳幼児期の子どもの一般的に多くの時間を母親と過ごすことから、母親が経験しやすい情動に、子どもが偏向を形成する可能性は高いと考えられよう。よって本研究では、母親と子どもの情動特性の関連性を検討する。

さらに、その関連性が、発達に伴ってどのような変化をたどるかについて検討したい。もし発達初期に重要他者との間で経験された情動状態が個人の中で固定化し、さらにそれが他者との特定の関係性を導くことでますます強固になるという考え(Magai et al, 1995)に従うならば、年齢が上がるにつれて、母親との間で築かれた情動特性がより強固なものへと固定化していくと考えられる。しかし、発達初期といっても、それが詳しくはいつ頃なのかということは明らかとされていない。保育園や幼稚園など、最初の社会的集団に参加するようになる幼児期の子どもたちは、新しい他者との情動的コミュニケーションを通じて、情動特性を変化させる余地を残しているのか、それともすでに基盤となる情動特性をもち、それが強固になっていく段階にあるのか。

以上のようなことから、本研究では、幼稚園・保育園に在籍する幼児(4・5・6歳)を対象に、母親と子どもの情動特性の関連性を検討し、さらに、年齢が上がるにつれて、その関連性が強固になるかどうかについて検討することにする。

方 法

対象者

福岡県内の幼稚園および保育園に通う園児（4歳44名；男児23名・女児21名，5歳154名；男児89名・女児64名・不明1名，6歳86名；男児50名・女児36名，年齢不明1名）の母親285名。

調査時期

2000年11月～12月

手続き

園児の母親に質問紙調査を実施し，以下の尺度に対する回答を求めた。

子どもの情動経験に関する尺度

情動の主観的経験に関する尺度：the Discrete Emotion Scale IV (DES IV; Izard, Libero, Putnam, & Haynes, 1993) を参考にして作成した。喜び・興味・怒り・悲しみ・恐れ・驚き・嫌悪・軽蔑・罪悪感・恥・照れ・自己嫌悪の12情動のうち，子どもにおいて観察されにくいと思われる軽蔑・自己嫌悪の項目を削除し，また，恥については，母親が子どもの情動について答えるということが性質上難しいと思われたこと，また，類似する情動として照れがあることを考慮し，削除することとした。さらに，新たに誇りの1項目を加え，計10の情動について，それぞれの情動を子どもが見せることがどの程度あるかを7件法で評定するように求めた。

母親の情動経験に関する尺度

子どもの情動経験と同様，DES を参考に10情動について，日常生活においてどの程度経験することがあるかを7件法で評定するように求めた。

母親の情動認知に関する質問紙

これは，母親の情動認知の偏りが子どもの情動経験の評定に影響を及ぼす可能性があることを考え，その影響を統制することを目的とした変数である。坂上(1998)が大学生を対象に行った研究によれば，被験者は，日頃自分が経験しやすい情動を曖昧な図版刺激にも読み取る傾向を示したという。

本研究では，独自に作成した何も感情を感じていない人の顔写真12枚を質問紙に印刷し，その人が情動を感じているとしたら，どの情動を感じていると思うか，喜び・興味・怒り・悲しみ・恐れ・驚きの中から一つ以上選択させた。ぴったり当てはまるものがない場合でも，必ず一つは選ぶように求めた。二つ以上当てはまると感じた場合には，それら全てを回答してもらった。感じていると回答された情動に1点を与え，12枚の合計により，6つの情動の個々の認知得点を算出した。

なお，写真刺激の作成・選別に際しては，事前に予備調査³⁾を行った。

結 果

各情動ごとに，母親と子どもの情動経験得点の相関を見た。その結果，すべての情動において中程度の正相関がみられた (Table 1)。子どもの情動経験の評定に母親の情動認知がバイアスをかけている可能性が考えられたため，偏相関で母親の情動認知得点を統制しての母親と子どもの情動経験得点の関連を見たが，結果はそれほど変わらなかった (Table 1) ため，子どもの情動経験評定における母親の情動認知のバイアスは，考慮外とみなすこととした。さらに，上記の相関係数を，4歳・5歳・6歳の各年齢ごとに算出したところ，4歳児における照れ・罪悪感・誇りの3情動以外は，全て中程度の相関が見られた (Table 1)。

また，母親と子どもの異なる情動間の相関係数を見たところ，多くの情動間において有意な相関が見られた (Table 2)。子どものポジティブ情動（喜び・興味・誇り）は，母親のポジティブ情動のほとんどと弱～中程度の正相関がみられ，母親のネガティブ情動（怒り・悲しみ・恐れ・驚き⁴⁾・嫌悪・照れ・罪悪感）とはほとんどが無相関であった。また，子どものネガティブ情動は，母親のネガティブ情動のほとんどと弱～中程度の正相関がみられ，母親のポジティブ情動とはほとんどが無相関であった。

³⁾ 写真刺激作成の予備調査

①写真刺激の作成

協力者16名（男女8名ずつ）に「何も感情を感じていない顔をしてください。」と頼み，肩から上をデジタルカメラを用いて写真撮影した。その際，全員におでこを出してもらい，髪が顔にかからないようにし，また，服装は，全員白のシャツで統一した。顔全体や目・口など，顔の中に動きのないことを確認し，これを協力者の無表情の写真とした。

②写真刺激の選定

大学生23名（男性12名，女性11名）を被験者に，写真刺激を選定するための調査を行った。研究者が被験者の前に1枚ずつ写真を呈示し（順番は無作為），それぞれの写真に写っている人の感情について，喜び・興味・怒り・悲しみ・恐れ・驚きの6つの感情の中から当てはまると思うものを2つ以内で選ぶように求めた。ぴったり当てはまるものがないと思う場合にも，最も近いと思う感情を強制的に選択させた。

その結果，16枚のうち，半数の人の回答が一つの感情に偏ったもの，また，感情の種類が2つ以内に限定された4枚については，様々な感情認知を導くための材料刺激として不適切と判断し除外した。残りの12枚については，ある程度多様な感情認知を導きうる刺激と判断し，これを道具として用いることとした。

⁴⁾ 驚きについては，ポジティブ情動である (Izard, 1991) という考えや，ポジティブ情動とネガティブ情動の中間に位置する (Tomkins, 1962) という考えもあるが，本研究においては，結果の解釈可能性から，ネガティブ情動に入るものと判断した。

Table 1
母親と子どもの各情動経験得点の相関係数

	全	情動認知統制後(全)	4歳	5歳	6歳
喜び	.52**	.52**	.40**	.43**	.61**
興味	.37**	.36**	.32*	.28**	.54**
怒り	.47**	.47**	.49**	.44**	.39**
悲しみ	.39**	.40**	.30†	.35**	.40**
恐れ	.49**	.48**	.37*	.43**	.61**
驚き	.60**	.60**	.70**	.54**	.69**
嫌悪	.48**	—	.53**	.49**	.39**
誇り	.35**	—	.15	.31**	.57**
罪悪感	.46**	—	.19	.38**	.58**
照れ	.36**	—	.22	.38**	.46**

†p<.10, *p<.05, **p<.01

Table 2
母親と子どもの個別情動経験得点の相関係数

		子ども									
		喜び	興味	怒り	悲しみ	恐れ	驚き	嫌悪	誇り	罪悪感	照れ
母親	喜び	.52**	.34**	-.00	.06	.04	.25**	.04	.34**	.09	.16*
	興味	.42**	.37**	.05	.15*	.12†	.28**	.07	.35**	.15*	.19**
	怒り	.06	.17*	.47**	.32**	.34**	.15*	.15*	.15*	.18**	.21**
	悲しみ	.05	.16*	.40**	.39**	.39**	.27**	.18**	.11	.31**	.27**
	恐れ	-.05	-.05	.33**	.36**	.49**	.34**	.27**	-.00	.38**	.31**
	驚き	.04	-.04	.21**	.31**	.39**	.60**	.31**	.03	.42**	.34**
	嫌悪	-.05	.02	.26**	.32**	.35**	.28**	.48**	-.07	.29**	.36**
	誇り	.24**	.17*	.07	.08	.09	.26**	.17*	.35**	.05	.08
	罪悪感	.05	.14*	.41**	.40**	.42**	.29**	.19**	.13†	.46**	.32**
	照れ	.05	.08	.29**	.36**	.29**	.24**	.10	.05	.30**	.36**

†p<.10, *p<.05, **p<.01

次に、子どもの年齢が上がるにつれて、子どもの情動経験に対する母親の情動経験の影響が変化するかどうかを調べるため、各情動ごとに母親の情動経験得点上位25%を高群、下位25%を低群とし、これと年齢（4・5・6歳）の2×3の二要因分散分析を行った（Table 3）。その結果、全ての情動において母親情動経験の主効果がみられた。多重比較の結果、6歳児では、全ての情動において、母親情動経験高群が低群に比べて子ども情動経験が高かった（ $p<.05$ ）。5歳児では、怒りを除く全ての情動において、母親情動経験高群が低群に比べて子ども情動経験が高く（ $p<.05$ ）、怒りにおいても同様の傾向がみられた（ $p<.10$ ）。4歳児では、喜び・興味・怒り・恐れ・驚き・嫌悪の6情動において、母親情動経験高群が低群に比べて子ども情動経験が高く（ $p<.05$ ）、照れにおいても同様の傾向がみられた（ $p<.10$ ）。また、年齢の主効果

は、全ての情動においてみられなかった。

交互作用がみられたのは、罪悪感（ $F(5,130)=2.64$, $p<.10$ 有意傾向）と誇り（ $F(5,155)=3.175$, $p<.05$ ）の二つであった。

子どもの罪悪感経験における年齢の単純主効果をみたところ、4歳児においては有意差が見られなかったが、5歳児（ $F(1,130)=18.54$, $p<.01$ ）と6歳児（ $F(1,130)=28.22$, $p<.01$ ）において有意差が見られ、多重比較の結果、両年齢とも母親罪悪感経験高群が低群よりも有意に高かった（ $p<.01$ ）。また、母親情動経験得点の単純主効果をみたところ、母親罪悪感経験高群において有意差が見られ（ $F(2,130)=3.27$, $p<.05$ ）、多重比較の結果、6歳が5歳よりも有意に高かった（ $p<.05$ ）。これに対して、母親罪悪感経験低群では、年齢による差はみられなかった。

Table 3
母親情動経験と年齢による子ども情動経験の平均値および標準偏差と二要因分散分析結果

		母親情動経験 低群			母親情動経験 高群			主効果		交互作用
		4 歳	5 歳	6 歳	4 歳	5 歳	6 歳	母親情動経験	年齢	
喜	N	6	30	18	6	21	16	F(1,91)=33.08 **	F(2,91)=.31	F(2,91)=.21
	M(SD)	5.39(.71)	5.37(.81)	5.40(.80)	6.17(.29)	6.35(.60)	6.48(.30)			
興	N	14	48	30	8	36	24	F(1,154)=27.09 **	F(2,154)=.61	F(2,154)=1.66
	M(SD)	5.33(.80)	5.64(.85)	5.31(.64)	6.08(.64)	6.09(.64)	6.21(.55)			
怒	N	11	41	28	8	29	12	F(1,123)=37.58 **	F(2,123)=2.25	F(2,123)=.90
	M(SD)	2.79(1.23)	2.53(1.11)	2.50(.88)	4.71(1.17)	4.07(1.39)	3.56(1.37)			
悲	N	12	50	26	7	24	10	F(1,123)=13.56 **	F(2,123)=1.01	F(2,123)=1.30
	M(SD)	2.47(1.05)	2.08(.79)	2.00(.77)	2.86(.88)	3.22(1.25)	2.73(1.05)			
恐	N	8	38	25	11	48	20	F(1,144)=55.79 **	F(2,144)=2.78	F(2,144)=1.51
	M(SD)	2.00(1.17)	1.68(.91)	1.63(.75)	3.42(.79)	2.71(.95)	3.22(.96)			
驚	N	10	30	23	13	33	13	F(1,116)=64.87 **	F(2,116)=.46	F(2,116)=.47
	M(SD)	1.97(.79)	2.18(1.03)	1.72(.90)	3.87(1.00)	3.75(1.47)	3.74(1.11)			
嫌	N	9	41	23	8	43	14	F(1,132)=37.49 **	F(2,132)=.81	F(2,132)=.69
	M(SD)	2.00(.94)	2.03(.66)	1.90(.61)	3.38(.68)	2.89(.99)	2.86(.90)			
照	N	6	32	23	8	41	20	F(1,124)=24.53 **	F(2,124)=.76	F(2,124)=.14
	M(SD)	2.92(.85)	2.59(1.05)	2.38(1.08)	4.02(1.20)	3.73(1.30)	3.73(.62)			
罪	N	10	41	24	8	39	14	F(1,130)=30.26 **	F(2,130)=1.57	F(2,130)=2.64 †
	M(SD)	2.63(1.07)	2.44(.79)	2.39(.71)	3.20(.62)	3.25(.95)	3.90(.88)			
誇	N	13	41	21	14	49	23	F(1,155)=29.80 **	F(2,155)=.51	F(2,155)=3.18 *
	M(SD)	4.62(1.04)	4.44(1.03)	4.25(.82)	5.05(.71)	5.27(1.04)	5.78(.97)			

† p<.10, *p<.05, **p<.01

子どもの誇り経験における年齢の単純主効果をみたところ、4歳児においては有意差が見られなかったが、5歳児 ($F(1,155) = 16.62, p<.01$) と6歳児 ($F(1,155) = 27.97, p<.01$) において有意差が見られ、多重比較の結果、両年齢とも母親罪悪感経験高群が低群よりも有意に高かった ($p<.01$)。母親情動経験得点の単純主効果をみたところ、母親罪悪感経験高群において有意差が見られ ($F(2,155) = 3.22, p<.05$)、多重比較の結果、6歳が5歳よりも有意に高い傾向がみられた ($p<.10$)。これに対して、母親罪悪感経験低群では、年齢による差はみられなかった。

考 察

今回取り上げた10情動全てについて、母親が当該情動を経験しやすいと子どもも同じ情動を経験しやすいということが、5歳児・6歳児において示された。このことは、4歳児においても、罪悪感・誇り・悲しみ以外の7情動において示された。よって、母親と子どもの情動特性は関連を有していることが示されたと言える。幼児期の子どもの情動特性の大部分は、母親の情動特性の影響

をすでに十分に受けて形成されていると言える。

母子の情動特性の関連性が、年齢が増すにつれて変化するかという点については、罪悪感と誇りの2情動のみ変化があることが示された。相関係数をみると、2情動いずれも、4歳では相関がなかったのが、5歳で中程度の相関を有し、5歳から6歳の間では相関係数が2程度高くなっている。また、分散分析の結果より、子どもの情動特性に対する母親情動特性と年齢の交互作用が見られたことから、母親情動経験頻度が高い場合、5歳から6歳に年齢が上がると、子どもの情動経験頻度が上がるといえる。これはすなわち年齢が上がることで、子どもの情動特性が、母親のそれに似てくるということと考えられよう。またあるいは、今回の子供の情動特性の評定が母親によるものであることから、年齢が上がると、母親が子供の情動特性を明確に認知するようになるとも考えられる。

Magaiら(1995)の主張からは、養育者との間で築かれた情動特性が、発達に伴って強固になることが推測されたが、そうした結果が示されたのは、罪悪感と誇りの2情動のみであった。4歳児の母子情動特性間の相関係数が、7情動においてすでに中程度あるということから考

えるに、4歳の時点で、子どもの情動特性はすでにある程度の固定的な形をなしているといえるのかもしれない。そして、保育園や幼稚園に通い始めるのに伴い、子どもは母親以外の他者との情緒的コミュニケーションを経験するにもかかわらず、母親の情動特性の影響は持続して子供の情動特性に影響を与え続ける。

では、子どもの情動特性がある程度形をなすようになるのは、一体いつ頃なのだろうか。これについては、今後、4歳以前の子どもの対象とした検討が必要であるが、以下のような先行研究から考えるに、それはかなり早い段階と言えるかもしれない。

例えば、子どもの情動的耐性能力の発達については、生後6ヶ月までの母親の子どもに対する関わり方が影響しているという知見が Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) によって示されている。すなわち、子どもは後になって母親以外の人々との社会的相互作用の中からも、情動耐性能力を獲得するはずであるが、発達初期に受けた影響が色濃く残ることを意味している (荘厳・益谷・今川・中道, 1989)。

また、家庭での感情についての会話を観察した研究 (Dunn, Bretherton, & Munn, 1987) によると、子どもが18ヶ月の時点で母親が子どもの感情に言及する程度は、半年後の24ヶ月時で子どもが自分の感情について話す程度と有意な正の相関関係が見られたという。

そうした知見から考えるならば、子どもは4歳以前の非常に早い段階で、養育者からの情動的刺激を元に自らの情動的特性を形成している可能性がある。

罪悪感と誇りについては、5歳から6歳に年齢が増すと、母親と子どもの情動特性が母親に似てくるということが示唆された。罪悪感と誇りにおいてのみ、このような結果が得られたことは、何を意味するのであろうか。

罪悪感と誇りは、今回取り上げた10情動の中では、出現するのがもっとも遅い情動である。よって、母親との間で築かれた情動特性の固定化も遅くに現れるということが、一つの可能性として考えられるかもしれない。Lewis (1993, 1999) は、生後1年目の後半くらいまでに現れる喜び・興味・驚き・悲しみ・嫌悪・怒り・恐れといった情動を一次的情動とし、この後に現れてくる情動を二次的情動として区別している。その大きな違いは、自己意識の関与があるかないかという点であり、二次的情動は自己意識的情動とも呼ばれる (遠藤, 1996)。自己意識的情動の一つである照れは、一般的に自己意識が出現するとされている (Kagan, 1998; Lewis, 1997) 1歳半前後に、自分が他者に注目されていることを意識して現れるという。さらに、罪悪感や誇りといった情動には、自己意識に加えて、自己評価 (あるルールや基準からして自分はいいのか悪いのかという評価) が介在するとし、2歳以降に現れるという。このように、罪悪感や誇りが、

今回取り上げた他の情動よりも遅くに発達するというならば、母親の情動特性から受ける影響も必然的に遅くに現れると考えられるかもしれない。

あるいは、罪悪感と誇りという自己評価が介在する情動の場合には、他の情動とは異なる発達の過程をたどる可能性もある。先にも述べたように、この2情動には、自己評価というものが介在する。2歳後半にさしかかると、子どもたちは、自らの基準からして自分の行動が失敗したと感受した場合には罪悪感、成功したと感受した場合には誇りを感じる (遠藤, 2002) ようになるという。このような情動経験の素地には、他者の賞賛や叱責などを経験し、ある種の社会的な基準やルールなどが内在化されることが必要である。このことから考えると、罪悪感や誇りといった情動は、養育過程において母親の評価基準が伝達され、内在化されることを通して、母親の情動特性に似ていくというプロセスが想定しうる。また、そうした情動の場合には、相対的に、母親の情動の伝染効果といったメカニズムは、子どもの情動特性の発達に大きな位置を占めていないという可能性もあるのではないだろうか。

養育者と子どもの情動特性が、具体的にどのようなメカニズムを通して関連を強めるのかについては、罪悪感・誇りのみならず、全ての情動において今後検討すべき課題である。本研究では、情動伝染効果やモデリングという、より直接的な効果と、養育者の情動特性にもとづく認知バイアスや養育行動選択といった、より複雑なプロセスを通しての効果の両者を想定して論を進めてきたが、今後はどちらのメカニズムが子どもの情動特性の偏向を生み出すものとして優勢なのか、また、それが個々の情動の特質によっても異なる可能性を視野に入れながら検討することが必要であろう。

次に、母親と子どもの異なる情動間の関連も多く示されたことについて述べたい。これは、子どもの特定情動が、母親の多様な情動経験と密接に関わり合いながら形成されていることを示すものであろう。ただし、ポジティブ情動間、ネガティブ情動間では多くの組み合わせで関連があるものの、母親のポジティブ情動と子どものネガティブ情動とはほとんど関連がなく、また、母親のネガティブ情動と子どものポジティブ情動も関連がなかった。すなわち、母親が例えば喜びを経験しやすければ、子どもも喜びを経験しやすくなるが、それは子どもの悲しみを抑制するものではなく、独立した関係にあるということである。これは、喜びと悲しみなど、いくつかの情動がしばしば対極関係に位置付けられる (Darwin, 1872) ことから考えると、やや矛盾に感じられないでもない。しかし、Izard (1991) が指摘するように、極性の概念は、必ずしも情動間の柔軟性のない関係や、二者択一の関係を示しているのではない。これは、各情動が、一概に肯

定的・否定的とされるものではなく、それぞれ個別の機能を有するという考え (Barrett & Campos, 1987) からすれば、妥当な結果であると考えられよう。また、母子の各情動間で、負の相関はまったく認められなかったことから、母親の特定情動が子どもの特定情動を抑制するといったことは考えにくいものと思われる。よって、子どもの情動は、基本的には母親の同カテゴリ（ポジティブとネガティブ）の情動と密接に関連しながら発達することが示唆されたといえよう。

異なる情動同士の関連については、包括的な研究はほとんどみられないものの、母親の悲しみと子どもの罪悪感の関連 (Zahn-Waxler & Kochanska, 1990) など、いくつかの報告がある。これは、情動同士の機能や特徴に根ざした組み合わせが、関連を生じさせるメカニズムであると考えられよう。本研究において示された、例えば母親の怒りと子どもの恐れなどの関連も同じメカニズムに基づくことが推測される。しかし、例えば、母親の怒りと子どもの罪悪感の間にはあまり関連がないことなどは、先行研究 (Ferguson & Stegge, 1995) の結果と多少矛盾する点であり、一貫した知見を得るには、今後の研究の蓄積が待たれる。

また、情動特性と情動認知との関連を検討した坂上 (1999) は、同じ情動間のみならず、悲しみと怒り、悲しみと恐れ、怒りと恐れなどの間に、特性と認知の間に相互に関連がみられたことを報告し、その考察として、被養育経験の中で、悲しみの表出に対して怒りで応答されるというような社会化を受けてくると、悲しみと怒りの間に結合が作られることになるといった可能性を指摘している。その場合、そのようなプロセスは、養育者が子どもの悲しみという情動に対して怒りを感じやすいという、固有の特性に根ざしているものと考えられる。そして、こうした特性は、養育者と子どもの情動の相互作用に、ひいては子どもの情動特性の発達に大きな影響をもたらすものであろう。

こうした養育者による子どもの情動への反応について検討する際には、メタ情動 (Gottman, Katz & Hooven, 1997) という概念が有用であるかもしれない。メタ情動とは、情動に対する情動や認知と定義される概念で、Gottman ら (1997) の研究においては、親の、自分自身の情動に関する自覚的意識や子どもの情動に対する態度や反応の質として取り上げられている。そして、これが子どもの情動経験の個人差に大きな影響をもたらすことが示されている。

また、Gottman ら (1997) の研究で取り上げられているメタ情動は、親の情動スクリプト (Jenkins & Oatley, 1996; Tomkins, 1995) の反映とも言える (遠藤, 2002) という指摘もある。情動スクリプトとは、近年情動の研究者によって注目されつつある概念であり (Magai,

1999; 久崎, 2003)、発達過程で同種の情動経験が習慣化して繰り返されると、その前後の文脈も含めて、ある種、一般化された認知的構成体が形成されることを言う。つまり、事象—評価—情動経験—養育者の対応などが一つの連鎖をなして個人の中に内在化され、さらにこうしたスクリプトが一度内在化されると、それは特定の関係性の文脈を超えて様々な状況に一般化され (遠藤, 2002)、徐々に変化しにくくなる性質を帯びていると考えられる (久崎, 2003)。例えば、悲しみの表出に対して怒りで応答されることが繰り返されると、自分の悲しみと他者の怒りが一つのセットとして個人の中に内在化され、それが様々な状況に一般化されていくといったことが考えられるだろう。また、子どもの情動スクリプトの構成には、養育者の情動スクリプトが重要な役割を担っている (遠藤, 2002) と考えられる。

こうしたことから、今後は、このような概念の導入も視野に入れた検討を行うことが有益であると言えるだろう。それによって、養育者と子どもの間で具体的にどのような相互作用が生じているのかということの解明に寄与できる可能性がある。

また、方法論的課題として、今回は、子どもの情動特性について母親から評定を得たが、今後、観察法を用いたり、第三者の評定を得るなどすることで、新たな結果が得られる可能性もある。

情動特性の詳細な発達メカニズムの解明には、さらなる検討がのぞまれる。

引用文献

- Ainsworth, M.D., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: Observations in the strange situation and at home*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum.
- Barrett, K., & Campos, J. 1987 Perspectives on emotional development: II. A functionalist approach to emotions. In J. Osofsky (Ed.), *Handbook of infant development* (2nd ed.). New York: Wiley. Pp.555-578.
- Darwin, C.R. 1872 *The expression of emotions in man and animals*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dunn, J., Bretherton, I. & Munn, P. 1987 Conversations about feeling states between mothers and their young children. *Developmental Psychology*, **23**, 132-139
- 遠藤利彦 1996 喜怒哀楽の起源—情動の進化論・文化論— 岩波書店
- 遠藤利彦 2002 発達における情動と認知の絡み 高橋雅延・谷口高士(編)感情と心理学—発達・生理・認知・社会・臨床の接点と新展開— pp.2-40 北大路書房

- Ferguson, T.J., & Stegge, H. 1995 Emotional State and traits in children : The case of guilt and shame. In J.P. Tangney & K.W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions : Shame, guilt, embarrassment, and pride* pp.343-367. New York : Guilford Press.
- Gottman, J. M., Katz, L. F., & Hooven, C. 1997 *Meta-emotion: How families communicate emotionally*. Mhwh, NJ: Erlbaum.
- 久崎孝浩 2003 恥および罪悪感の発達メカニズムに関する理論的検討 心理学評論, 46, 163-183
- 久保ゆかり 1997 他者理解の発達 井上健治・久保ゆかり(編) 1997 子どもの社会的発達 pp.112-130
- Hembree, E.A 1986 Individual differences and developmental changes in infants' emotion expressions during early mother-infant interaction. *Unpublished master's thesis*, University of Delaware, New York
- Haviland, J.M. & Lelwica, M. 1987 The induced affect response : 10-week-old infant' responses to three emotion expression. *Developmental Psychology*, **23**, 97-104
- Hoffman, M.L. 1976 Empathy, role taking, guilt, and development of altruistic motives. In T. Lickona (Ed.), *Moral development and behavior; Theory, research, and social issues*. Holt, Rinehart & Wintson.
- Izard, C.E. 1996 感情心理学 莊巖舜哉(監訳) 比較発達研究会(訳) ナカニシヤ出版 (Izard, C.E. 1991 *Psychology of emotions*. New York: Plenum Press.)
- Izard, C.E., Libero, D.Z., Putnam, P., & Haynes, O.M. 1993 Stability of emotion experiences and their relations to traits of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 847-860
- Jenkins, J.M. & Oatley, K. 1996 *Understanding emotions*. Cambridge, MA: Blackwell.
- Kagan, J. 1998 Is there a self in infancy? In M. Ferrari & R.J. Sternberg (Eds.), *Self-awareness: Its nature and development* pp.137-147. New York : Guilford.
- Lazarus, R. S. 1994 How are emotions distinguished from moods, temperament, and other related affective constructs? In P. Ekman & R.J. Davidson (Eds.), *The nature of emotion* pp.49-96. Oxford: Oxford Universities Press
- Lewis, M. 1993 The emergence of human emotions. In M. Lewis & J.M. Haviland (Eds.), *Handbook of emotions* pp.223-235 New York : Guilford Press
- Lewis, M. 1997 The self in self-conscious emotions. In J.G. Snodgrass & R.L. Thompson (Eds.), *The self across psychology* pp.119-142. New York : The New York Academy of Sciences.
- Lewis, M., 1999 The role of the self in cognition and emotion. In T. Dalgleish & M. Power (Eds.), *Handbook of cognition and emotion* pp.125-142. New York : Wiley.
- Malatesta, C.Z., & Wilson, A. 1988 Emotion/cognition interaction in personality development : A discrete emotions, functionalist analysis. *British Journal of Social Psychology*, **27**, 91-112
- Martin, G.B. & Clark III, R.D. 1982 Distress crying in neonates : Species and peer specificity. *Developmental Psychology*, **18**, 3-9
- Magai, C. 1999 Affect, imagery, and attachment. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment* pp.787-802. New York : Guilford Press
- Magai, C., Distal, N., & Liker, R. 1995 Emotion Socialization, attachment, and patterns of adult emotional traits. *Cognition and Emotion*, **9**, 461-481
- Magai, C., & McFadden, S. 1995 *The role of emotion in social and personality development*. New York : Plenum Press
- 坂上裕子 1999 感情に関する認知の個人差—感情特性と曖昧刺激における感情の解釈との関連—. 教育心理学研究, 47, 411-420
- 莊巖舜哉・益谷真・今川真治・中道正之 1989 母親の感情表出スタイルと13か月齢の子供の感情行動 教育心理学研究, 37, 353-358
- Tomkins, S.A. 1995 *Exploring affect: The selected writings of Silvan S. Tomkins (edited by E.V. Demos)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tronick, E.Z. 1990 Emotions and emotional communication in infant. [*Special Issue*] *American Psychologist*, **42**(2) 112-119
- Zahn-Waxler, C., & Kochanska, G. 1990 The origins of guilt. In R. Thompson (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation: Vol.36. Socioemotional development* pp.182-258. Lincoln : University of Nebraska Press.